



BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 11 号

平成 27 年 2 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079（直通）

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

祈る、ということ

大正大学 人間学部 教育人間学科

教授 滝沢和彦

目次

1 頁：巻頭言

2 頁：さざえ堂だより（3 頁まで）

4 頁：BSR 図書室・今後の予定

※研究ノートはお休みさせていただきます

のっけから恐縮だが、私の実家の宗教は神道である。このことを私は結構あちこちで公言してきた。今回、そのことを知っている本『通信』編集担当の M 氏から原稿依頼が来た。なぜか。私が、学長先生の次に鴨台観音によくお参りしているから、とのことであった。

学長先生は、全学生の「元気で明るく楽しい学生生活」と「学生中心の大正大学」の正しい実現を毎日祈り願っておられる。私も、これほど立派な内容ではないが、そのとききの自分なりの願いごとのためにお参りをしてきた。例えば、教え子のお子さんが大きな手術をすることになったと聞けば、その成功を祈る。8 月

から 9 月にかけては、教員採用選考 1 次合格者全員の名前と顔を思い浮かべながら 2 次の突破を願う。自身の原稿締切が近づいたときにも「何とか納得できるものが書けますように」と毎日祈った。そして、同じことを自宅近くのお稲荷さんでもやっていたのである。

そこに共通するのは、自分個人の力を超えたあるものに頼りたい、すがりつきたいという気持である。学習指導要領のいう「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」である。

私自身、どうしてこのような気持ちを持つに至ったのか。

子供の頃から毎年正月には神主さんが家に来られて祝詞をあげて

下さった。その内容や意味について親から教えられたことはない。長時間の正座もきつかった。ただ、正月は神主さんが来るものだ、と思っていた。それが大学に進学し実家を離れてからは、実家に電話するたびに「お前の健康と安全をいつも仏様（神道なのだが、家ではご先祖様を仏様と言っていた）にお祈りしているから」と言われた。両親は、「お前も信じろ」とは言わず、自身が祈っている姿を見せただけである。

「大いなるもの」への教育、宗教的情操をめぐる議論が喧しいが、まず大人自身が祈っている姿を示すことが大切なのだと思う。

さざえ堂だより お堂番学生ボランティア座談会

さざえ堂は、シニアお堂番さんのほかに学生ボランティアの力を借りて、運営されています。先日、この春に卒業を控えた 2 人の学生ボランティアさんにお堂番を通じて学んだことなどを座談会形式でお聞きしました。

そこで、今回は紙面を拡大し、ボランティアにたずさわっている学生さんのインタビューを掲載いたします。インタビューにお答えいただいたのは、はた やしゆんいち 幡谷俊一さん（仏教学部 4 年）と いそかわ まき 五十川卓紀さん（文学部 4 年生）のお二人です。

一 本日はお忙しいところありがとうございます。はじめに、どういうきっかけでお堂番ボランティアを知ったのか教えてくださいいただけますか？

五十川：私は、T-po のメール案内で知りました。へえ～こんなのやってるんだ、

というのが率直な感想でした。実はそれまではさざえ堂でお堂番をされている方がいるというの知らなかったんです（笑）ちょうど大学 4 年生になる前の春休みだったんですけど、せっかくだから大正大学でしかできないことをしたいなって思って応募しました。

幡谷：僕は 4 年生になるときのガイダンスで、さざえ堂のお堂番をやってみませんかという案内チラシをいただきました。そのチラシには申込書もついていたのですが、いただいた瞬間に名前を書いていたね（笑）これはすごくいい機会だなんて思いました。

一「いい機会」といいますと？

幡谷：僕は他大学から編入してきたので、大正大学で勉強している時間っていうのはほかの人よりも短いんですね。そこで、大正大学と何かかわりを持ちたいなんて思いました。

これまでも、いろんなことに積極的にかわるようになってきました。盆おどりや鴨台祭などはその一つです。実は、2013 年のさざえ堂落慶法要のときに、私も職衆として参加させていただきました。そこで、そういった縁もあってせっかくだからと思って応募したんです。

一 チラシをもらったとき、周りの人はどんなリアクションでしたか？

幡谷：ほかの人はあまり興味がないような感じでしたね。単位も給料もない完全なボランティアでしたし（苦笑）

ただ、僕は「無償」っていうのにすごく魅かれたんです。見返りを求めてやるべきではないことが世の中にはあるんじゃないかなと。こういう機会があって、ボラ

ンティアでそれをやらせてもらえるなら、なおさらやりたいなと思って。

一 さすがお坊さんですね。五十川さんは単位認定もないことに気づいていました？（笑）

五十川：最初の時点で気づいていました（笑）でもそれはあまり気にせずに応募しました。むしろ、仏教の大学でこういう機会がある、ということに魅かれましたね。

一 二人のお気持ち、大変ありがたいですね。実際にお堂番ボランティアをされているときは、どんなことを聞かれましたか？

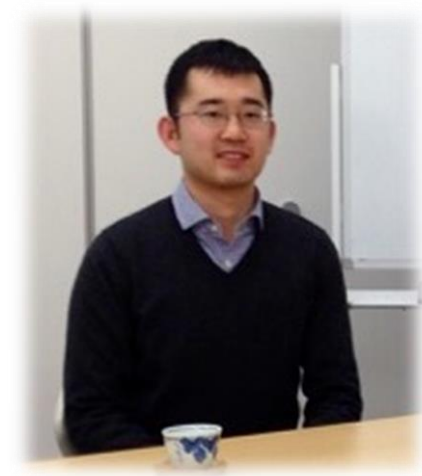
五十川：お堂のことはもちろんですけど、意外に大学のことについて聞かれることも多くありました。どんな学部があるのかとか、どんな学生がいるのかなどですね。外からお見えになった方は、「大正大学の学生＝お坊さん関係」って思ってた方が多かったんですけど、私みたいな一般の学生が多いということもお話しさせていただきました。

さざえ堂については、いつできたかとか、観音様の指に結ばれている糸は何か、ということをよく聞かれました。最初のうちは私が勉強不足だったので、答えるのが大変でしたけど。仏教に関して難しい質問をされて困ったときはシニアのお堂番さんにバトンタッチしたりして乗り切りました（笑）

一 ほかに困ったなっていうことはありましたか？

五十川：さざえ堂の手前まで来て帰ってしまう人が意外と多かったですね。

幡谷：あー、あるある（笑）



はた やしゆんいち
幡谷俊一さん

仏教学部 4 年生（仏教学科宗学コース）。一般大学を卒業後、大正大学へ編入学。僧侶としての修行も終え、春からは大正大学大学院へ進学し、一層研鑽を深める予定。

五十川：ばらまつり、菊まつりの季節だと、さざえ堂前に飾られている花だけを見て帰ってしまう人が多いとか。

幡谷：あとは、外観の写真だけ撮って帰られてしまう方とかね。車いすの方で、階段なので上まで登れないという人もいました。

でもそういうときは、御手糸の話をして、御手糸にふれば上にいる観音様と縁が結べますよとご案内させていただきました。そうやって説明すると、へえそうなんだって、ありがたそうに御手糸を握って帰られる方が多くいらっしゃいましたね。

一 お堂番ボランティアをやってみた感想はいかがですか？

幡谷：勉強になったなという感想ですね。楽しかったっていうのもありますが、お堂番をやるまで大正大学のことをあまり知らなかったなっていうのに気づかされましたね。このあたりの地名を鴨台って呼ぶのも知りませんでしたし（笑）大学のことも含め、シニアのお堂番さんたちから色々教わりまして、学生の僕よりよく知っているなと感心させられました。

一 なるほど、自分のことを振り返る良い機会になったわけですね。五十川さんはどうでしょう？

五十川：私は楽しかったですね。色々な方が外からお見えになられて、大正大学のことについてお話しさせていただいたり、一緒に案内してくださるお堂番さんの方々とおしゃべりさせていただいたりして、世代間交流ができたことなどはありがたかったですね。ただ仏教の知識がなかったということについてはすごく大変でした（笑）

あと、就活のときにお堂番をやっていたことが、面接官とコミュニケーションをとるのに役立ちました。

一 それはどういうところですか？

五十川：大学で頑張っていたことを聞かれたとき、このお堂番ボランティアのことをお話しさせていただいて。そもそも大学にお堂があるところなんてめったにないですから、それは何？ ということと興味津々に色々聞かれました。

そこから、大正大学でしかできないことをやりたいと思って、このボランティアをやっていたんですっていう話をさせていただきました。

一 たしかに、それはほかの就活生にはない「強み」ですね（笑）

五十川：そうなんです。この話をすると「それ面白いね」って興味をもってくださって、そのあとの話がとてもしやすくなるんです（笑）

一 お堂番の経験とご自身の生活とをあわせてお考えになったとき、なにか良い影響はありましたか？

幡谷：自坊でもお檀家さんと話すときなどは、このボランティアでの経験がかなり生きているなと感じますね。これまで、世代の違う、ましてや自分の両親ぐらいの人たちとざくばらんに話すなんていう機会ありませんでしたから。

五十川：外からお見えになる方だけでなく、一緒におつとめくださるお堂番さんとの世代間交流も身になっていると思います。たんなる情報の交換、知識の交換だけではなく、相手に伝わる話し方そのものまで考えさせられ大変勉強になりました。わずか週に 1、2 回のボランティアでしたが、本当にやってよかったと思っています。ありがとうございました。

一 学生のなかには、まださざえ堂を訪れたことがないという人もいます。最後に、先輩から後輩への一言をいただけますか？

五十川：せっかく大正大学に来ている



いそかわ さき
五十川早紀さん

文学部 4 年生（歴史学科日本史コース）。戦国時代を専門とし、卒論では明智光秀を取り上げるなど今をときめく歴女。春からは医療関連用品を扱う専門商社に就職する。

のだから、ほかの大学では味わえない、この大学のオリジナルな部分にふれないままではもったいないかなと思います。せめて在学中にお堂に足を運んでみてほしいと思います。

幡谷：入学後のオリエンテーションの一环にさざえ堂参拝を組み込んでもいいかもしれませんね。全学で足を運ぶ機会を作って、そこからお堂番ボランティアにも興味をもってくれる人がいるといいなと思います。お堂番を通じて得られる経験は大きいからです。

一 お二人とも、ありがとうございました。この経験を糧に、お二人が益々ご活躍されることを期待しています。

お二人のお話から、さざえ堂が「祈りの場」だけではなく「学びの場」としても機能していたことが感じられ、うれしく思いました。BSR 推進室では、多くの学生のさざえ堂訪問&ボランティアへの参加をお待ちしています。（T）

BSR 図書室

天野和公

『みんなの寺のつくり方

—檀家ゼロからでもお寺ができた！』

(雷鳥社、2011 年、1,404 円+税)

2002 年 10 月に開基した仙台市「みんなの寺」。その寺の住職夫人という立場で著した一冊です。

みんなの寺住職夫妻はお二人とも寺の生まれではなく、なんの素地もない仙台市の新興住宅街で試行錯誤しながら寺院を開創し、様々な荒波に揉まれながらも寺院の運営を軌道に乗せ、500 軒の檀家を持つに至りました。

その過程であった様々な困難、ご自身の葛藤、お寺の仕事と子育ての狭間での苦労話などがわかり易く楽しく読めるように書かれています。

加えて、全編の所々に配している「コラム」と編集部による「お寺をつくりたい人へ このぐらいは知っておこう」というコーナーは、実際にお寺をつくる、また寺院運営にあたっての実用書としても参考になります。

みんなの寺住職（著者の夫）は、元々は浄土真宗本願寺



派の僧侶でしたが、みんなの寺を作るにあたって、宗門の制度上の制約、同宗寺院の強い反対があり、同宗門の僧籍を返上して単立宗教法人として寺を設立しました。その根底にある伝統仏教の構造上の問題点を考えることで、現代の伝統仏教のあり方を再考する契機となり、また寺の運営が軌道に乗っていった中、どのようにして檀家の心を掴んでいったのかという具体的な事例は社会と寺の関係性を考え、これからの時代にあった寺院運営、寺のあるべき姿を示唆してくれる一冊ではないかと思います。

また、熱意ある寺の運営の中にもユニークなエピソードは、読んでいて思わず微笑んでしまいます。 (M)

今後の予定

2月21日(土)	11時～12時	花会式(浄土宗)	鴨台観音堂前
	9時～13時	あさ市	南門 けやき広場
	13時30分～	区民ひろば講座「仏教に親しむ」＜超簡単！瞑想法＞	区民ひろば清和第一
*主催=豊島区民ひろば清和第一			
3月21日(土)	11時～12時	花会式(春休み特別法要)	鴨台観音堂前
	9時～13時	あさ市	南門 けやき広場

